



HAL
open science

ハイチの強姦に関する一研究 – 性犯罪の心理学的・社会的側面に注目して

Obrillant Damus, Sunami Inoue, Hiroko Noda

► To cite this version:

Obrillant Damus, Sunami Inoue, Hiroko Noda. ハイチの強姦に関する一研究 – 性犯罪の心理学的・社会的側面に注目して. 2019, <10.4000/etudescaribeennes.20351>. <hal-02357325v2>

HAL Id: hal-02357325

<https://hal.science/hal-02357325v2>

Submitted on 19 Dec 2020

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.



Distributed under a Creative Commons Attribution - NonCommercial 4.0 International License

ハイチの強姦に関する一研究性 – 性犯罪の心理学的・社会的側面に注目して

オブリヨン ダミュス

Traducteur : Sunami Inoue et Hiroko Noda



Édition électronique

URL : <http://journals.openedition.org/etudescaribeennes/20351>

DOI : [10.4000/etudescaribeennes.20351](https://doi.org/10.4000/etudescaribeennes.20351)

ISSN : 1961-859X

Éditeur

Université des Antilles

Ce document vous est offert par Université de Strasbourg



Référence électronique

オブリヨン ダミュス, «ハイチの強姦に関する一研究性 – 性犯罪の心理学的・社会的側面に注目して», *Études caribéennes* [En ligne], 42 | Avril 2019, mis en ligne le 15 avril 2019, consulté le 19 décembre 2020. URL : <http://journals.openedition.org/etudescaribeennes/20351> ; DOI : <https://doi.org/10.4000/etudescaribeennes.20351>

Ce document a été généré automatiquement le 19 décembre 2020.



Les contenus d'*Études caribéennes* sont mis à disposition selon les termes de la Licence Creative Commons Attribution - Pas d'Utilisation Commerciale 4.0 International.

ハイチの強姦に関する一研究性 - 性犯罪の心理学的・社会的側面 に注目して

オブリヨン ダミュス

Traduction : Sunami Inoue et Hiroko Noda

序論

- 1 ハイチ (Haïti) はアメリカ先住民のAyitiという言葉に由来し、「山岳地」を意味する。まさにクレオール語の格言でDèyè mòn gen mòn (「山の後ろにはまた山がある」) と言われるような山岳地である。ハイチは大アンティル諸島に属し、人口は1,050人で、その内、80-85パーセントがアフリカ系、15-20パーセントがヨーロッパ系との混血である。公用語は、1804年の独立以来フランス語が用いられ、1987年以降ハイチ・クレオール語も用いられている。宗教はといえば、エホバの証人、カトリック、プロテスタント、イスラム教、ブドゥゥー教等が挙げられる。
- 2 このように多様な文化が混ざり合う中で、性暴力に関する公の統計データは存在しない。心理的、経済的、社会的また文化的な要因が障害となり、被害を通報するという気風が育っていない為、実際に強姦被害にあった女性の数を把握するのは難しい。それでも2004年のジャン＝ベルトラン・アリスティド前大統領の出国後、そして多数の死者と路上生活者を出した2010年1月12日 (日本時間で1月13日) の地震の後、強姦の被害者が急増したことが分かっている。強姦が頻発する原因として、最貧困女性らの非識字問題や社会的、経済的、心理的、居住的ヴァルネラビリティの問題だけでなく、ハイチの司法の貧弱さが被害者に告訴を思い留まらせているということも挙げられよう。法律と沈黙の気風が相まって、強姦はハイチ社会の恒常的な問題となっている。男性優位の文化は、警察官が被害者に対して裁判官的態度を取る要因であり、強姦被害法律化の妨げとなっている。また、性犯罪者は強姦を犯罪と定めた2005年7月6日の法令を易々と逃れることがで

きる。2004年にいくつかの団体の責任者から得た証言によると、被告は裁判官を買収することができ、被害者の告訴書類は消滅してしまうのだ。

- 3 上流階級もしくは富裕層出身の暴行犯が投獄されることはまずない。それには複数の理由がある。彼らは、裁判官を買収し弁護士を雇うことができるし、被害者とその近親者に沈黙料を払ったり、被害者が告訴した場合、金を与えて沈黙させ訴訟を放棄させることができる。また、ある支援団体で得られた証言によると、富裕層もしくは権力のある男による強姦の被害者は、訴えた報復として、銃で撃ち殺されるのを恐れている。裕福な犯罪者は政治的、経済的、社会的、文化的資本によって、慣例的に行われている強姦罪無法化の恩恵に浴することができる。さらに、富裕層に属する被害者は、より貧しい環境にある被害者に比べ、富裕層の暴行犯を擁護する傾向にある（上流階級もしくは富裕層の女性はスキャンダルや非難を恐れ、訴えるのを躊躇する。裕福で教養のある上流階級出身の女性に比べ、非識字もしくは教育を十分に受けていない下流階級の女性はその点、大胆で無遠慮だと言えよう）。
- 4 強姦は「精神的衝撃」(Ferenczi, 1934)、つまり、実存的危機をもたらし、個人として生きること、誰かと共に生きること、そして人と繋がり合って生きることに極めて重大な影響を及ぼす出来事であり、精神的、心理的、身体的な苦しみの要因である。多くの被害女性が年月が経った後も事件の記憶を留めている。強姦が女性のアイデンティティーにネガティブな影響をもたらすことに議論の余地はないだろう。何人もの強姦被害者が自己との和解・再生の契機を求めて支援団体や教会へ赴く。新たなアイデンティティーの統合は自己の再構築、再生への一過程である。ここでいうアイデンティティーとは「自己に関わる感情、表出、過去の経験、将来的な見通しの総体」(Malewska-Peyre, 1985)と定義される。多くの強姦被害者にとって宗教は新たな自己同一化及び自己回復を図る場となっている。支援団体や宗教は、人と人との繋がりを構築することで臨床的精神療法的役割を果たしているのである。
- 5 自国の文化であろうと、受け入れ社会(外国)の文化であろうと、人は絶えず自己の死と新たなアイデンティティーによる再生という二重のプロセスに直面している。本論文は、「死と再生」という通過儀礼の過程(Eliade, 1959; Van Gennepe, 1981)を社会心理学的観点から検討しようとするものである。「死と再生」のプロセスは、誕生に始まり、死に至るまで継続する。強姦のような多数の心的外傷を伴う出来事の場合、このプロセスは、当事者が自己の存在理由を見出し自身の進むべき方向を探り出すというダイナミックなものとなる。強姦は被害女性のアイデンティティーにどのような影響を及ぼすのだろうか？ 強姦の間やその後、被害者はどのような感情を経験するのだろうか？ 被害者は強姦による心的外傷をどのように乗り越えるのだろうか？

1. 研究の方法

- 6 2013-2014年、ポルトープランス (Port-au-Prince) を本拠に活動する支援団体 KOFIV (Komisyon Fanm Viktim pou Viktim) で30人の強姦被害者にインタビューを行った。見ず知らずの者による強姦²の被害者の大多数は20歳から 60歳までの女性であった。これらの非識字もしくは僅かに読み書きのできる被害女性の職業は、無許可の売り子、行商人などインフォーマルな形態の商売である。これらの女性は最も暴行犯を告発する傾向にある。それに対し、家族の者から強姦を受け

た被害者の年齢は5歳から19歳で、最年長の女性はインタビュー当時、大学で学士を修了するところであった。

- 7 本研究の目的は強姦が女性にもたらす心理的作用を描写することであった。非構造化インタビューを用いることにより、インタビュー協力者のライフヒストリー、社会人口統計及び社会経済的な叙述に関わるデータ収集を目的とした。個々のインタビューの平均時間は70分、支援団体の一部屋を借りて行った。分析目的のため、全てのインタビューの録音を書き起こした³。
- 8 2017年1月、性犯罪についての理解を深める目的⁴で、ポール・ドゥ・ペ (Port-de-Paix) 市立刑務所 (北西県) で約20人の投獄中の強姦者にインタビュー調査を行った。インタビューが行われた監房内ではプライベートの確保ができず、投獄者の犯した強姦について良質な情報を得る上で大きな妨げとなった。大多数の暴行犯、特に最も年配の者は強姦・輪姦の事実を否認するか曖昧な表現でのみインタビューに応じた。それに対し、より若い犯罪者は躊躇することなく豊富な証言を提供してくれた。2014年にポルトープランスで面会した被害女性の証言の長さとは対照的に、ポール・ドゥ・ペの強姦犯の話は手短であった⁵。強姦犯のインタビューに於ける語彙の乏しさは、監房内で非難的となり差別される (他の服役者らの前で自白した場合、クレオール語の軽蔑的な言葉で女性暴行人を意味する *kadejakè* と呼ばれる) ことへの恐れや、社会復帰できなくなるのではないかという恐れから来る自己防衛のメカニズムに依ると思われる。
- 9 被害女性のもとで行った複数のインタビューを横断的に分析するために、内容分析法 (Bardin, 1993) を用いた。経験的データから複数のカテゴリーを引き出すという、帰納法的な分析手続きを用いた。カテゴリーとは、被害者らの言説に現れる反復もしくは意味的顕著性を凝縮した帰納的な抽象概念を指す。インタビュー協力者の名前は匿名性を保つため変更してある。

2 . 理論的枠組み

- 10 本研究では、Van Gennepe (1981) の通過儀礼の理論を通して強姦を捉えようと試みた。強姦の経験は、分離・過渡・統合という三つの局面から特徴付けられ、感情、認知、特有行動等の心理学的現象と結び付けられる。強姦の心理学的側面を理解する上でこの理論の限界を補うため、主にフランス語圏、英語圏の社会心理学精神病理学の両分野の研究を参照した。

3 . 結果

- 11 通常の通過儀礼と同様、強姦は分離・過渡・統合の三局面⁶によって特徴付けられる。

3.1. 分離

- 12 意志に反して強姦の被害者となってしまった女性は、一度も強姦されたことのない女性と一線を画すこととなる。彼女たちは以前の状態に戻ることはできない。強姦されたことのない普通の女性との「分離」は決定的である (大多数の被害女性が自分は異常だと感じている)。

3.2. 過渡

- 13 強姦の結果、一般的に被害者は数日間から数か月間、自身の殻の中に閉じこもった生活を送る。この「過渡」期は、強姦によって一度に現れる身体的、社会的、経済的、心理的作用⁷⁾によって説明できよう。強姦に遭った女性は家に閉じこもるようになるが、それは、強姦被害者と知られるのを恐れるため、強姦犯とすれ違ふのを恐れるため、金や商品を盗まれたため、暴行で負傷した身体を回復するため、自己責任を感じるため、羞恥心から自ら外の世界との離反を選んでしまうためである (Barrois, 1988)。過渡期には、自身が被った混迷極まる出来事に意味を見出そうとする被害者もいる。逆に、自らの回復を拒否⁸⁾し、社会活動に参加したり他人を援助したりすることを放棄してしまう被害者もいる (ケア、セルフケアの倫理の危機)。過渡期は社会的宇宙的繋がりの一時的な意味喪失によって特徴付けられる。それは、強姦の体験によって「広義の自己」が社会と分離され、縮小された自己もしくは閉じこもった自己に変容するということから説明できよう。強姦は被害者の帰属意識、自己統一感、一貫性、そして時間の持続感覚に重大な影響を与える (Mucchielli, 1994)。

3.3. 統合

- 14 強姦の被害者はずっと閉鎖的な生活を送り続けるわけではない。この隠遁期 (過渡期)⁹⁾は一時的なものである。中には支援団体、教会、近親者、友人などの助けを得て共同体の生活に加わる者もいる。被害者を自己再構築のプロセスに導こうとする良心的な心理学者や社会学者も存在する。しかし、彼らの助言が実は、強姦を告発する気風を育てる上でしばしば障害となっている (悪夢のような体験を語る被害者を落ち着かせようとして、「よくあることなんだよ」と言って事件を在り来たりなものにしてしまうのだ。結果として、被害者の甘受・忍従態度を助長することになる)。
- 15 強姦による心理的打撃が比較的軽度の被害者は、認識論的社会的言語的コミュニティ¹⁰⁾に復帰可能である。だが実際にはサポートが必要となる。支援団体は、被害者が沈黙から自己を解放する際、強姦を告訴するよう促したり、感染症や性病の検査を受けるよう働きかけたり、強姦の再発予防教育などの研修への参加を勧めたりすることで、「過渡」期を短縮し被害者が再生のプロセスに入る手助けとなっている。
- 16 エディット・フィリスタン (Édith Philistin) は、KOFATIV (Komisyon Fanm Viktim pou Viktim. 被害女性のための被害女性による支援団体) に看護師、指導員、技士、企画調整係として携わっている。この支援団体は、その名が示す通り、強姦被害者によって創られた。KOFATIVは強姦に遭った多くの女性に、医療費や住居手当などの社会医療面、経済面、心理面での支援を行っている。エディットはKOFATIVの役割を次のように説明している。「まず、自己紹介するわね。私はKOFATIVの研究所で看護師と技士をしているの。強姦の被害者への教育も担当しているわ。通常は首都外のMartissant, Cité Soleil, Grand Ravinで女性たちに啓発活動をしているの。時々Jacmelにも同じ仕事で行くわ。アシスタントと企画調整もしているのよ」。
- 17 エディットは「KOFATIVの使命は予防、被害者支援、弁護の三つの軸」から成ると強調する。

- 18 「被害女性がKOFAVIVを訪ねて来ると、まず心理カウンセラーが励ますの。被害者は見捨てられたりしない。被害者のために毎週土曜日、啓発の場を設けていて、そこでは何を話してもいいの。何かに苦しんでいたら、それを自由に発言していいの。私たちは解決策を見つける援助をする。被害女性たちは性感染症や健康、教育、とにかく全てについて教わるの。この場は強姦について話し合うためのものだから、被害者には自分の言いたいことを言う自由があるのよ。参加者は全員強姦の被害者。だれも強姦について何の気詰まりも感じる必要がない。でも強姦体験を語るよう促すのは容易じゃなかったわ。以前はスポンサーがいなかったから、自分たちの力で出来ることをやっていたの。KOFAVIVはまだ知られていなかったから、被害者に直接会いに行ったり、幾つかの地区で女性に対する強姦についての情報を提供しに行ったりしたわ。被害者が強姦体験を話すように仕向けるのに色々な方法を取ったの。中には話すのを拒否する人もいたわ。色々な地区や共同体でKOFAVIVが行った感化活動のおかげで、被害女性たちは沈黙を破ることを学んでいったのよ。私は2004年からこの啓発活動に参加してるわ』。

3.4. 強姦によって生じる感情

- 19 インタビュー調査の分析により、強姦・輪姦の被害に遭った女性が経験する様々な感情が認められた。ここでは十数人のケース概要を用いて簡潔に提示する。

3.4.1. 破壊の感覚

- 20 強姦は被害者を打ち砕く、或いは被害者のアイデンティティーを分裂させるという点で破壊的作用を持っている。強姦はどのような方法で行われるにせよ、被害者が死と対峙することを免れ得ない。それは多くの女性の性生活の中で、むごたらしくトラウマ的な出来事である。顔を殴る、噛みつく、首を締める（又は絞殺未遂）、髪の毛を引き抜く、爪で傷つける、卑猥な暴言を浴びせる、平手打ちをする、刃物や銃で脅す等は、見知らぬ者による強姦の一般的な特徴である。「女性が自由な主体として誇りを持って二人の出会いの儀式的合意に同意する」(Jeffrey, 2003) のを否定することで、強姦犯は、平等な関係の上に成り立つ誘惑と同意を儀式化することのできない人間として振る舞うのである。暴行を犯す者の目的は被害者を象徴的、身体的に破壊することである。Sibony (1995) は「拷問者の狙いは相手を打ち砕くこと、破壊するために相手の限界に侵入することだ。それから、拷問者が法を持ち出す時、自分自身を無制限の法、つまり全体主義的法に一体化させるのだ」と言う。強姦は被害者にとってこの世の終わりを象徴する「存在の亀裂」(Mounier, 1946) を生じさせる。被害者は自身の人生に意味を与える必要があるにもかかわらず、まるで自分が存在しないかのような感覚を覚えるのだ。それは、他者攻撃や自己攻撃という形で現れることとなる。Sibony (1995) は強姦を「甘美な夢想は喪失し、言葉は価値を失い、ただ衝動的に行動に移るといった性的災難」と定義する。
- 21 犯罪者と被害者に常に自覚があるわけではないが、全ての強姦は破壊的な機能を持っている。強姦の中には拷問に相当するものもある。無意識的にしろ意識的にしろ、沈黙に徹するということは、被害者が強姦者の全体主義的法に従うことを意味する。強姦中と事後、被害者は一時的に断絶の感覚に襲われる。強姦は、被害者の実存感覚、信頼感、価値観、アイデンティティーを破壊してしまうのだ。
- 22 インタビュー協力者の一人であるオレリーは集団強姦による自身の人間性への影響を次のように語る。「時々自分が人間ではないような気がするの。強くなくて

は、と自分に言い聞かせるわ。事件を思い起こすと、自分がもう人間ではないように感じて、社会の中にもう自分の居場所は無いと感じるの。社会から自分を排除してしまうのよ。」

- 23 被害者の中には主体性の危機 (crisis of agency) を経験する者もいる。というのは、自ら行動を起こすことができず、自分の人生を方向付けることができず、自身の置かれた状況を変えることができないからだ。主体性危機の程度は被害者によって異なる。強姦は被害者のアイデンティティーの混乱を引き起こす出来事である。パーソナル・アイデンティティーとは次のように理解できよう。「個々の人生に基づく、唯一であるという感覚である。パーソナル・アイデンティティーは自己に関する認識と観念の総体から成り、個人の行動、認知、感情の間に安定した一貫性が存在するかのように感じさせる」 (Guichard et Huteau, 2007)。

3.4.2. 存在論的不安

- 24 インタビューで出会った全ての被害女性が、強姦に遭った後、存在論的不安を感じていることが明らかとなった。この感情は強姦犯から報復されることへの恐れ、強姦の被害者だと知られることへの恐れ (注目を浴びる感覚)、再び強姦に遭うことへの恐れ、と言い換えられよう。二つ目と三つ目の恐怖感については、象徴的、想像的な次元で捉えることができる。「被害女性は、当初、会う人のだれもが自分が何に遭ったかを知っていると思い込んでいる。それは幻覚によって生じる新たな侵入と言えよう。被害者はあらゆる人間関係を無効にする手段を取る。閉ざされた空間に引きこもり、例えばテレビやその画像などは侵入と感じられるのだ」 (Lopez et Filizzola, 1993)。
- 25 強姦者によって殴り殺されるという恐怖感は、被害者がそれに打ち勝たない限り強姦の告訴や法制化の障害となる。2011年、Christ-Roiのテントの中で四人の男に強姦されたコリンヌ (彼女の10歳の娘は同じ日五人の男に暴行された) は、恐怖のため犯人の告訴を思い留まった。「どこかですれ違うのが怖くて強姦を訴えませんでした。私には伴侶がいないので。(略)」。
- 26 強姦は不慮の事故である。被害者は存在的不安感、当惑感、罪悪感、屈辱感、空虚感、劣等感などのネガティブ感情と戦わねばならない。同様に、恐怖心とも格闘している。強姦被害者だと知られることへの恐怖、HIVに感染することへの恐怖、男性に対する恐怖、性交渉に対する恐怖、強姦犯に再会し殺されることへの恐怖、親元を離れることへの恐怖、セックス・パートナーを満足させられないことへの恐怖、夜外出することへの恐怖、再び強姦に遭うことへの恐怖、侮蔑されることへの恐怖、妊娠することへの恐怖、愛されることへの恐怖などである。

3.4.3. 死の切迫感

- 27 被害者の中には、強姦前、その間、その後、真に死の脅威にさらされた者がいる。その上、強姦は銃器による脅しの下になされることが多い。被害女性は強姦自体だけでなく、強姦者の発する言葉によっても恐怖に陥れられる。強姦は被害者に自己の死を感じさせるのだ (Jankélévitch, 1966)。被害者の中には強姦時意識を失った者もいる。多くの被害者はトラウマとなる事件の起こった日と場所の記憶を失っている。身体的暴行は意識を失わせることもあるのだ。犯行時、強姦者が黒い覆面をすることから分かるように、犯罪者は、顔を見られることへの恐怖から、被害者を象徴的な死 (死の脅迫、身体的、心理的、精神的暴行、被害者の精神器官への侵入) に追い込む非人間的行為へと掻き立てられるのだ。強姦されている時というのは地獄である。被害者にとってこの世の終わりである。被害者

によっては、世の中は不合理だというネガティブな社会観を持つようになることもあり、それは復讐とヴァルネラビリティのシンドロームとして現れる。

- 28 フィロメヌは強姦時、殺されるのではないかという恐怖を覚えた。「強姦が済んだら殺されると思ったわ。私が精神錯乱に陥っていても、何の同情も搔きたてないと分かっていた。冷酷極まりない男たちよ。どこかの家へ連れて行かれて、銃を突き付けられたわ。男の一人に乱暴され、服を引き裂かれた。私は死んだようになり、こう言った「もし私が殺されたら、2人の子どもが悲しむわ。あなたたちは後悔する。私は誰からもどこからも援助を受けていないの」。すると私を乱暴に服従させた男に突き飛ばされた。そして別の男が私に銃を向けてこう言ったの。『黙れと言ってるだろう。お前に飛びかかってやる』って」。ポーレットは地獄のような体験を次のように語っている。「説明不可能よ、だって予測できないもの。分かる？ 自分に起こった時、私は麻痺状態だったの。本当に醜悪だわ。最悪なのは、息子と他の子どもたちの目の前で起こったってことよ。強姦がどういうものか分かる？」

3.4.4. 無力感

- 29 強姦の間もその後も、多くの女性被害者は自身が無力で下等な存在であると信じ込むようである。強姦は女性に劣等感を抱かせるために為されることもある。インタビューで出会った被害女性たちは、犯人に殺されるという恐怖に押し潰されていた。多くのハイチ人女性に見られる下等意識は社会文化、家族文化、宗教文化と結び付いている（社会、家族、宗教は女性が男性の意思に従うよう奨励している。女性は男性よりも身体的に弱いと信じている女性も未だに存在する）。捕獲的男性は女性を性的対象物、もしくは容易に得られる獲物と見なすことで成り立っている。強姦は性的攻撃であり、女性をコントロールする手段である¹¹ (Campbell et Muncer [1994]; Campbell, Muncer et Gorman [1993]; Campbell, Muncer et Odber [1997]; Farzanehに引用, 2006)。
- 30 フィロメヌはPiste でテント生活をしていた。2012年7月30日、カーニバル祭からの帰宅中、三人の男から凶器で脅され強姦された。29歳の時だった。「私が近くに来ると、男たちは地面に横になるよう命じたの。私は泣いて言ったわ『お願いだから乱暴しないで。私には子どもが二人いるの。ちょっと外出しただけなのよ』。一人が私に『黙れ。お前とセックスしてやる。服を脱げ』と言ったの。私はこの状況ですべきことを考えたわ。一人が私の服を破ろうとし、別の男は私のズボンをはぎ取った。奴らに従うしかなかった。私を完全に弱らせると、一人が残酷にセックスを始めた。その間、見張りをしていた男がこう言ったわ。『急げ。次は俺の番だ』」。
- 31 暴行者の中には男性的アイデンティティー、もしくは男性中心主義的権力を顕示するために女性を強姦する者もいる。自分の誘いに応じない女性に耐えられないか、女性をどう誘えばいいのかわからないのである。つまり、男らしさや強さを発揮するために強姦するのである。集団で強姦を行う男性の自尊感情は極めて低く、女性を従順な存在と捉えている。被害者の証言によると、警官が強姦を犯したケースもあった。キャンプの安全を守ることが仕事であるにもかかわらず、性犯罪者に転じる者もいるのだ。
- 32 ポーレット (51歳) は2010年1月12日の地震後、混乱するキャンプの中で警官と二人の共犯者に強姦された。「2010年1月12日の後に起こったの。あの時は皆追い詰められていた。家が壊れて、皆、路頭に迷っていたわ。世界中でニュースになった。私たちはAkraキャンプに住んでいたの、Delmas 30 と32の間よ。三人の子どもを

連れていて、その一人は甥なの。大勢の人がキャンプに居たわ。人間らしい生活を望むなら、そこには居られなかったわね。でも選択肢はなかった。他にどこにも行く場所はなかった。私は変わった女なのよ。私の住んでいる地区ではそれぞれの方が私のことを違う風に理解してるわ。私は出かける時と帰って来た時に「こんにちは」と言うだけ。たったそれだけ。だって他にすることがあるんですもの。そんな風に振る舞っていると、いつの間にか人を不愉快にしてしまうのね。地区の男たちにはっきり言われたわ。「この女が何をしているか知りたいもんだ。非常にエレガントで誰とも話をしない。いつも忙しくしてて、テラスでだれかと冗談を言ってるどころなんか見たことがない。でも、三人の子持ちなんだ」。私は人との時間が全くないの。夜は警備隊が来るんだけど、警官は暴行するのよ。どういうことか分かる？ 独り者で誰にも口を利かない女や上流階級の女を見たら、他人の娘を犯したいと思ったら、口説くんじゃなくて、夜襲うのが警備隊のやり方よ。警官が強姦者に変身するの」。

- 33 2012年、アメリは輪姦被害に遭った。当時32歳であった。彼女によると、事件は彼女に言い寄っていた男が度を越して仕組んだものだという。非常に暴力的な事件で9mm拳銃も使われた。暴行犯は強姦の後彼女を殺そうとした。アメリは飛行場に設置されたキャンプで生活していた。インタビューの際は涙を抑え切れなかった。

「ある男が私に言い寄っていたんだけど、『うん』と言わなかったの。ある日彼は『俺が口説いてるのにお前は聞こうとしない』と言ったけど、私はひるまなかった。彼には何の恨みもなかったけど、何と口説かれようと逆らっていたの。ある日、夜中の12時頃、彼はキャンプに入って来た。テントを強く叩くものだから朝かと思ったわ。子どもの悪戯かと思ったら、予想に反して五人の男に取り囲まれた。手荒く捕まえられてナンバ男が待ってる所まで連れて行かれた。押された勢いで誰かのシャツを掴んだら、一人が彼に言ったの。『こいつはお前のシャツを掴んで破ろうとしたんだから、テントの中で撃ち殺してしまえ』。すると別の男が『殺すな。どこかへ連れて行くんだ』と言った。それで、どこか別の場所へ連れて行かれた。私は歩かなかった。地面を転がり、引きずられ、9mm拳銃で一発撃たれて怪我を負ったわ。頭にはひびが入った。『死んだ』と思ったわ。それ以外は何も考えなかった。どこかに着くと五人から強姦された。そして、男たちは私を撃ち殺すために城壁の頂上にのせた。一人が首謀者に『お前の短刀、どこだ？』と聞くと、『持って来なかった。取りに行く』と答えた。通行人が耳にして白人(国連軍の兵士)を呼びに行った。兵士に気がつくやうと、男たちは逃げ出した。私は耐えられなくて汚ない溝に身を投げたの」。

3.4.5. 性的対象物になる感覚

- 34 強姦は性行為の親密な側面を奪い取ってしまう。それ故、強姦・輪姦に遭った後、正常な性生活に戻れない女性がいるのだ。強姦は被害女性の性機能に重大な影響を及ぼす。中にはこれを期に性生活に終止符を打つ女性もいる。彼女たちの目には性行為が惨たらしく恐ろしいものに映るのだ。もはや自分に性的活動が可能だとは思えないのだ。
- 35 小売業を営む20歳のクロディーヌは2014年5月、Bonimanと呼ばれるキャンプで強姦被害に遭った。2014年9月、二度目の強姦で妊娠した。自身の心理的、社会的、経済的貧困状態の悪化を恐れ、性生活を葬る決意をした。「強姦に遭った後、性的欲求がほとんどなくなったわ。よく考えて、自分の状態が男性との関わりがあると気づいたの。もし妊娠中に誰かと関係を持ったら、その人はずっと私と居てはくれない。セックスした後、多分どこかに行ってしまうわ。自分の子どもではないという理由で。男性との関係は私の貧困と苦痛を増すだけ。苦しくても子ど

もと二人で暮らす方がまだいいわ（日中は飲食せずに寝て過ごし、朝は絶望的な気分で起きる）。神様はまだ私を憐れんで下さらない。」

- 36 母親を亡くし、娘に無関心な父親を持つオレリーは2012年4月3日、Gerald Batailleに位置するキャンプで集団強姦の被害に遭った。オレリーは性的欲求を抑制する。なぜなら性欲は恥ずべきものだと思っているからである。自身の性欲が完全に消え去って欲しいと思っている。強姦に遭う前は、正常な性生活を送っていたと言う。現在愛人である男性は、オレリーに愛されていないと感じている。彼はオレリーの機能不全に気づいているが、強姦のことは知らない。オレリーは無意識に彼に対して奇妙な行為や行動を見せるという。「今、ある男性と付き合っているの。でも恋人とは思っていないわ。彼は結婚していて奥さんと子どもがいるの。彼にはもう人生があるのよ。彼は私を愛しているのかもしれない。私を助けてくれる。私も彼の助けにに応じているわ。セックスはする、でも感じないの。彼はよく言うわ。『オレリー、お前何か問題があるぞ。親身になってやってるのに、俺のこと愛してないだろう』って。彼は私の本当の問題に何も気づいていないわ。彼に『私はどんな行動を取っているの?』と聞くわ。時々無意識にしていることがあるの。彼が私がしていることを教えてくれる。『本当?』、でも私は自覚がない。彼は私の奇妙な行為や行動が強姦と関係してるとは思っていないわ』。

3.4.6. 社会からの自己排除

- 37 被害者によっては強姦事件の後、もはや社会に存在しないような感覚を持つ者がいる。数日間から数か月間、社会的、文化的営みから自己を排除し、安心できる場所に引きこもる。この自己排除の期間は古典的な通過儀礼の「過渡」期（Van Genep, 1981）に相当する。
- 38 クロディーヌは強姦犯に家に居るよう強要された。「ギャングだったんだと思う。立ち去る前に『外に出たらbase¹² 117からひどい目にあうからな』って言われたわ。三日間家から出られなかった。四人の覆面男に強姦されたの。私にはあいつらの顔が分からないけど、向こうは私を知ってる。あいつらは常にキャンプに居たから、私は三日間安全な屋内で過ごしたの。』
- 39 1957年生まれのジョゼットはパンの売り子でChrist-Roiのテントで暮らしていた。2011年のある朝、テントの近くで見知らぬ男に凶器で脅され強姦された。その後、彼女はある一定期間家に閉じこもることを決意した。「強姦に遭った後、生きる気力を失ったわ。性交渉を断っていたのに、強姦されたのよ。無理矢理セックスさせられたの。当時は本当に不調だったわ。外に全然出なかったもの。パンを売りに出るのも止めてしまった...」。

3.4.7. 存在的大変異

- 40 インタビューで出会った強姦被害者は皆、事件が忘れ難いものだと指摘する。彼女たちには心的外傷性的人格（Crocq, 1997, 1999）が認められる。強姦は被害者が以前の自分に戻ることを不可能にするという点で、時間横断的アイデンティティー（時間横断的アイデンティティーとは自己の不変性、もしくは時空間を越えた自己連続性のことである）の危機を招く。被害者の多くが証言するように、強姦の事実を受け入れることはできても忘れることはできないのである。強姦は、望まない負の立場や境遇を強いることで、被害者をネガティブに変質させる。多くの被害者は、合意に基づいた性交渉の経験があったとしても、犯された女、処女を奪われた女という境遇を強要されたと感じている（中には一度も性交

渉の経験が無い女性もいた)。強姦によって被害者が自身の性別を変更し、女性(という性)から断絶したり(caenésisme¹⁹)、暴行者に同一化したりするような場合も見られる。これらの現象は、精神的、心理的視点によると、強姦以前と強姦以後の往復として捉えられる。被害女性は「自己」の重要な一部分を喪失するのだ。強姦は人間の尊厳、人間性、存在に対する犯罪であると言えよう。強姦者によって惨たらしくセクシュアリティに「入門」させられた被害者の場合(被害者が処女である場合)、強姦は二種類の幻想(Deutsch, 1994)を引き起こす可能性がある。男性の力を借りずに子供を産めるという単為生殖の幻想と、「屈辱を受けたから、自分で自分を汚す」という売春の幻想である。売春婦の多くは強姦の被害者である。単為生殖の幻想は、エロチズム(性愛)に対する恐怖と潜在的暴行者への恐怖に関わりがあると思われる。強姦はCaillois (1988)の言う『一貫性という聖』に衝撃を与えるのだ。「『一貫性という聖』は俗世界に於ける一貫性、統一性、持続性を維持させるものである。つまり、安定性、連続性、不変性の要因と言える。生を調整する役割を果たし、抑制と平静を促し、死の欲動を退ける』。

- 41 多くの被害者が強姦を存在論的脅威と捉えている。なぜなら、強姦は自己保存、つまり意味や価値体系の象徴的システムである身体(Sullivan, Landau, Kay, 2012)に重大な損傷を与えるからである。強姦は、善は善人に、悪は悪人に起こるものだという盲信を強化する(Lerner, 1987, 1998)。
- 42 カロールは2012年、Christ-RoiのAcaciaで夜9時半から10時にかけて起こった集団強姦の被害者である。当時39歳であった。ローストソーセージの販売をする彼女は、帰宅した所を四人の見知らぬ男に取り囲まれ、廃屋に連れて行かれた。男たちを思い留ませようと悲鳴を上げたが、殴られ平手打ちをされた。強姦は彼女の人間のアイデンティティーを変質させた。カロールは自身が正常ではないと感じている。「強姦に遭ってから自分は普通じゃない、人とは違うと感じるの。薬を飲んでるわ。普通の女性に戻るために時々煎じ薬を飲むの。強姦の苦しみはまだ続いている」。

3.4.8. 復讐願望

- 43 同じ犯罪者から強姦を複数回受けた被害者もいる。この依存的で切迫した性行動は、犯罪者が強姦の持つ快楽性から自らを断ち切ることができないということを表している。多くの被害女性は復讐の念に燃えている。それは被害への賠償がないことだけでなく、性犯罪者が罰せられないという風潮によっても増長される。復讐願望は不公平感、つまり公正な社会への信頼感の喪失から生み出されるのだ。
- 44 ローズメヌ(21歳、4歳児の母)は2012年8月10日の夜中一時頃、Chancerelle病院横のJean-Marie Vincentのテント内で強姦に遭った。義姉(もしくは義妹)とそのテントで暮らしていたが、義姉が留守の間、二人の男によって強姦を受けた。ローズメヌは殴られ平手打ちをされ金を盗まれた。彼女は強姦被害者が暴行犯を殺すことを望んでいる。「私は強姦の被害女性全員に、暴行した奴らを殺すよう要請するわ。あいつらは、たとえ服役したとしても強姦を止めないんだから」。
- 45 本稿で既に何度か触れたオレリーは自身の復讐願望を呪いを込めて次のように言い表している。「私に暴行した三人の若者の死が見届けられるよう、いつも神様をお願いしてるわ。神様にあいつらを殺すようお願いしているの。人の不幸を望んだりしてはいけないと言うけれど、私はいつもあの男たちの不幸を願って

る。クリスチャンだから神様にお祈りをするの。善悪を見分ける目は持っているわ。神様は全部ご存じなんだから。私はいつもあいつらの不幸を望んでるのよ。目の前で死んでいくのを見ながらこう言ってやりたいわ。『私に何をしたか覚えてる？ 人生ってどんなものか知ってる？ ほら、自業自得よね...』」。

3.4.9. 自己喪失

- 46 多くの女性は強姦の際、意識を失う。精神器官が異常をきたすからだ。非論理的に聞こえるかもしれないが、強姦中に実感されるこの奇妙な感覚、或いは自己喪失感によって、被害者は起こり得る自己の死と向き合うことができる。自らの命を救うため、犯されるがままになるのである。
- 47 リーズは靴の行商人であった。2004年、商売しているところを三人の男に凶器で脅され強姦された。事件は廃屋内で起こった。暴行犯は金と靴を奪って逃げた。「(略)他の男たちがサンダルを見てる間に一人が触ってきたの。どこかの家の中に連れて行かれて、殴られて強姦されたの。(略)2004年に起こったことよ。私は意識を失った...」。
- 48 自分が自分でないような感覚は何年にも渡って続くことがある。レオニーズは12歳の時、父方の保護者(レオニーズの母親が住まわせていた父親の義理の兄弟。レオニーズの父親はアメリカ在住であった)から強姦を受けた。33歳になったインタビュー当時もなお、自己の人格喪失感を次のように語る(彼女は自身の受けた強姦の原因を求心的因果関係の中に位置づけている。つまり、自分は強姦されるために生まれ、自分には強姦者を引き付ける何かがあるのだと考えている)。「時々自分が穢れているように感じるわ。私は多くの罪を背負っているのよ。皆から好かれ、求められる。溢れんばかりの魅力、それが私の大罪なの。私には先天的な問題があるの。もしそれが分かっていたなら排除していたわ。生まれもった罪をどう取り去ることが出来るの？ もし排除してしまったら、別の人間になるのかしら？ 自分的一部分を奪い取ることになってしまわないかしら？」

3.4.10. 感情の抑制

- 49 強姦時、犯罪者は銃や刃物で脅して被害者が騒がないようにする。しかし、死の脅威は被害者を黙らせるのに十分だとは限らない。そのため、暴行犯は被害者の口を塞ぐ。被害女性は自身の感情を閉じ込めることを余儀なくされる。強姦の後、暴行犯は被害者に沈黙するよう迫り、さもなくば殺されるか、(訴えたところで)真面目に取り扱われないと脅すのである。強姦時、暴行犯は被害者が騒がないのを見て、合意しているとみなす。沈黙は被害者が後々感じる罪悪感の要因と言えるだろう。というのは、何人かの被害者は強姦犯を思い留まらせるために騒ぎ立てるべきだったと証言しているからである。沈黙の掟が原因となり、女性に対する強姦の大半は、被害者と犯人のみが知る秘密儀礼—公の場で行われる「儀式」に対して—の体裁を取ることとなる。Lopez と Filizzola (1993)によると、罪悪感¹⁴は被害者が自分の感情について考えをめぐらし、それを乗り越え、自身のライフストーリーに意味を与える助けとなる。「罪悪感¹⁴は被害者を心的外傷性の主体者として(構造的に)据える。起きたことへの自己責任という考え方は、むしろ被害者を想像を絶する出来事から救うのだ。そして、自身のストーリーの行方を語れるようになり、象徴的な領域に辿り着くのである」。被害女性が沈黙する要因(Germain et Langis, 1990)として、屈辱、罪悪感、起きたことを信じる困難さ、法的プロセスに関する懸念などが挙げられる。

- 50 ザベットは1962年生まれ、五人の子どもの母である。あるグループのリーダーと二人の共犯者に暴行された。彼女はテント生活をしていて、強姦の際、殺されるのを恐れて感情を押し込めた。「その若者たちの歩き方はまるで...酒を飲んで酔っ払っているようだったわ。太ってた。あんなのを相手に闘えやしないわ。騒ごうものなら一喝される。諦めるしかなかったのよ。もし奴らに殴られたら致命的よ。心臓が止まるような殴り方をするんだから。もし私が死んだら子ども達は窮乏するでしょう。従うしかなかった。選択肢はなかったのよ」。

3.5. 強姦：辱めと人間性否定の手段

- 51 強姦被害に遭った女性は皆、その体験が人間性を破壊するものであると証言している。多くが自尊感情の低さ、希死念慮、他害行為、過敏性、自己嫌悪、衝動性といった人格障害に苦しんでいる。残虐な者たちに虐待され、性の道具にされ、その結果、一時的にはあっても非人間的アイデンティティーを自己の中に感じ取ってしまうのである。
- 52 ザネットを暴行した者たちは彼女の人間性を否定したことになる。「強姦はそんなに長くは続かなかった。あいつらは急いでたから、私のお腹に長いこと乗っかっていたりしなかったわ。私は動物みたいに扱われたのよ」。
- 53 マタ（19歳）は2011年12月、「養父」から強姦を受けた。養父の家に八日間滞在した時のことだった。「どうして私が？」という問いへの答えは見つからない。彼女は、強姦者を事件まですっかり信頼していたという。「いつも本当の娘のように可愛がってくれた。彼には息子しかいなかったから、私のような娘が欲しかったっていつも言ってたわ。強姦を境に自分がもう人間でないように感じるの。心の中でこう言うわ。『私はこんなむごい仕打ちを受けるようなことをしたの？ どうして私なの？ ああ、これは本当に起きたことなのよ！』」
- 54 強姦は被害者を辱めるための暴力的儀式であると言える。被害者は証言の中で動詞「辱める・侮蔑する」とその名詞「辱め・侮蔑」を頻繁に使用している。暴行者は、辱めることで被害女性に存在的ヴァルネラビリティを強く感じさせるのだ。女性の六人に一人が強姦の被害者であるという事実を知るならば、強姦は絶対的男性主義の表れの一つであると言えるのではないだろうか。ハイチでは、強姦は全ての女性の頭の上を漂うダモクレスの剣なのである。性犯罪者の目的は被害者を人間や女性の尊厳にまで高めることではない。強姦の狙いは女性を従属的、支配的な地位に貶めることにあるのだ。
- 55 カロールは侮蔑の体験を次のように語っている。「私は辱めを受けたの。人は私を病気だと思うかもしれない。三、四人の男に強姦されたと知られたら、侮蔑されるのよ。価値も存在もない者として見られるの。恥ずかしくて¹⁵家を出られなかったわ。ずっと家の中に居た。誰にも事件のことを知られたくなかった。屈辱を味わったわ」。
- 56 フィロメヌも自身の屈辱感を次のように証言する。「自分が正常でないと感じたわ。社会から辱めを受けたの。人間とは思えなかった。自分がどこにいるのか分からなかった。神様が手を差し伸べて下さったわ。家に帰って姉（もしくは妹）に強姦のことを話したの。そうしたら彼女は態度を変えて、私と話をしなくなった。私の人生は終わったと思ったわ。犯罪者から性感染するのが怖くて翌日病院に行ったの。幸いにも陰性だった」。

3.6. 強姦：男性による抑圧の道具

- 57 2017年1月ポール・ドゥ・ペ市立刑務所で行った調査で、犯罪者の否認的態度¹⁶は、単に強姦観念を誤って認識していたり、強姦観念が希薄なためだけではなく、男性優位主義の恒久性との関連が明白に見られた。身体的暴力を伴っていないければ強姦ではないと思っている者がいる。ロバートは「俺にとって強姦 (kadejak) っていうのは、どうやって女を口説いていいかわからない時、性的暴行をして殴りつけることだ」と言う。他の犯罪者には、性的暴行で現行犯逮捕された場合でなければ強姦を犯したことになるかと思っている者もいる。例えば、ジャックは現行犯逮捕されなかったので近所の女性を強姦したことを否認する。「俺は(法の)乱用の被害者だ。証拠もなく有罪にされて、こんな惨めな生活を強いられるんだ。現行犯逮捕でなければ有罪にならないはず。俺は強姦したとは思ってない」。
- 58 多くの犯罪者は罪の意識を軽減するために被害者が処女ではなかったと主張する。そして、セックス経験の豊かな女性や処女を既に失っている女性は性交渉を拒否してはならないかと思っていると云えるだろう。元彼女を強姦したポールは、「俺の家でセックスした。あいつはもう性交渉に慣れてたんだ。皆知ってるぜ」と言っている。
- 59 19歳のピエールは強姦の事実を否定しない。しかし、彼の言葉の裏には、被害者である16歳の元彼女は強姦時すでに処女を失っていたので彼を訴えるべきではなかった、という暗黙の認識がうかがわれる。「12月に暴行した。俺の家でやった。あいつは警官に俺が処女を奪ったって言ったんだ。セックスしたけど、処女じゃなかったぜ」。
- 60 多くの犯罪者は強姦を起こす前、被害女性と数か月から長期間の恋愛関係にあったと言いき、女性は恋人との性交渉を拒否してはならないかと思っている。中には「そんなに何分も続かなかった」と言いき、消し去ることの出来ない強姦行為を時間の短さを理由に過小化しようとする者もいる。
- 61 強姦とは、男性の性的幻想が具現化する場である。強姦は、多くの男性が女性を従属させるため、物扱いし (Daligand, Gonin, 2000) 辱めるために用いる手段である。
- 62 我々の一般的な理解に反し、強姦は性犯罪者にも心理的痕跡を残す。女性を銃などの凶器で脅すという強姦行為は、身体的、心理的、精神的な作用を及ぼさずにはおかない。被害者同様に犯罪者も後悔、屈辱、羞恥、冒瀆感などを覚えることがある。ウィルバートは元彼女に暴行したことを非常に後悔していて、刑務所で人生を終わることを恐れている。「強姦を犯すんじゃないかった。投獄されて初めて自分の犯した過ちが見える。犯してはいけない過ちが。ここにいると、昔には売春婦ってのがいるのが分かるよ。25グルド、50グルドで男と寝るようなね。俺は強姦罪で投獄されてる。こんなとこに居るべきじゃないんだ。もし罰を受けなきゃいけないんだら俺は... 9年の刑を終える5か月前に死ぬ奴だっているんだぜ。俺は監房で死ぬかもしれない。ここには娯楽がないんだ。どうにもならないんだ...」

3.7. 強姦：男性特有の暴力的儀式

- 63 暴力的儀式は恒常的な社会的病いであり、何度も起こり、無秩序を生み出す。強姦は、社会に由来する事象であり、全ての人間社会に存在する。身体、心理、精

神に関わる暴力的儀式であり、強姦者にとって象徴的、個人的、集団的な複数の領域への加入儀礼となる。また多くの場合、それは性交渉への入門を意味する。強姦は主観的な経験であり、社会的、心理的、精神的に構築されたものである。

- 64 法律上、強姦は「暴力、強制、脅迫、不意打ちによって他者に対してなされるあらゆる種類の性的挿入」と定義され、ハイチの刑法によって罰される。

『第278条（2005年7月6日の法令、第2条）。暴行、脅迫、不意打ち又は心理的影響力を用いて同性もしくは異性の者に対しわいせつな行為をした者あるいはその未遂を行った者は強姦及び他の性的暴行罪となり、10年の強制労働が課せられる。

第279条（2008年7月6日の法令、第3条）。15歳未満の者に対してなされた犯罪の有罪人には15年の強制労働が課せられる。

第280条（2005年7月6日の法令、第4条）。有罪犯が被害者に対して権威的影響力を及ぼす階級もしくは権威的地位を利用して犯罪を犯した場合、一人か複数の共犯者がいる場合、もしくは、被害者を死傷させた場合、終身の強制労働が課せられる。』

- 65 非識字者や学校教育を十分に受けていない、貧しい暴行犯は社会階級の最低層に属し、証言や観察によると、刑法上最も大きな割合を占めている。彼らの投獄の実態は、金銭的困窮、教育レベルや識字レベルの低さ、法律や法的装置の機能の仕方についての無知¹⁷、社会的文化的資本の乏しさ、（判事、被害者、被害者の近親者、弁護士等からの）圧力によって簡単に自白するという事実などによって説明されるだろう。

結論

- 66 ハイチでの女性に対する強姦は、多くの場合、被害者の居住的、社会的、経済的ヴァルネラビリティに起因する暴力的儀式と言える。強姦によって被害女性は心理面、社会面、経済面で更にもろく傷つきやすくなる。強姦の被害者は一生それを負い続けることになる。強姦は時間と共に消え去ることのない身体的、精神的、心理的烙印なのだ。それは被害者だけでなくその近親者の人生にも影響を及ぼす。強姦に遭った女性の人生は略奪される。多くの被害者は強姦に伴って起こる恐怖、感情障害や行動障害を乗り越えられないでいる。本論文で明らかにされたように、強姦によって引き起こされる複数のネガティブ感情は互いに結び付いている。一過性の場合もあれば、数年から一生続く場合もある。
- 67 強姦のもたらす衝撃的な結果にもかかわらず、被害女性が人生に意味を見出し自己を再構築することは可能である。被害者は強姦によって破壊される。しかし、ヒトデがちぎれた体の一部を繋ぎ合わせるように、強姦の被害者も自己を再建できるのである。
- 68 暴行者にとって強姦は快楽的で幸福的な面を持つ（強姦は快楽と幸福感をもたらす）。強姦によって心地の良い感覚を生み出し、自分の抱えるフラストレーションに対応することが可能になる（Dollard *et al.*, 1939）。強姦は愛情不足に苦しむ男性が犯す犯罪と言えるだろう。強姦によって、自尊感情もしくは男性的アイデンティティを修復するのである。激しい暴行を伴って強姦が犯される場合、その行為は試練的儀礼に分類される（Le Breton, 2005）。強姦者が死としのぎを削って強烈な肉体感覚を求める極限的スポーツである（セックスは一種のスポーツであり、昨今はその腕前さえ問題になる）と言えよう。強姦時に被害者から殺される可能性もあり、強姦はリスクテイキング行動である（コンドームを使わない強姦者は被害者からの感染リスクを負うし、被害者が強姦中もしくはその後、犯罪人

を殺害することもある)。強姦の無い社会が存在するだろうか？ 強姦は撲滅し得るだろうか？ インタビュー調査で出会った大多数の女性被害者は見知らぬ者から強姦に遭っていた。犯罪人は、自己の不満に満ちた人生に復讐するために女性を強姦する精神的社会的病質者なのだろうか？ 暴行者は、自己防御システムが働き、自身の犯罪を認めることが困難である (Billon, 1984)。強姦は暴力に含まれ、暴力は人間社会に固有のものである (Damus et al., 2017)。とはいえ、強姦に対する一次的、二次的予防教育は可能である。強姦は避けることもできるのだ。

- 69 裕福層と貧困層の犯罪人の法の下での不平等を是正するため、あらゆる社会階級の被害者が告訴し強姦犯罪を法制化する気運を作り上げるよう努めなければならない。そのためには、学校や大学などでの公的教育、家庭教育、支援団体による教育が最も重要な役割を担うべきであろう。「司法的暴力」(Foucault, 1975)は常に抑止効果があるわけではない。強姦者の中には、治療や社会復帰への援助などによって第二のチャンスが与えられることが必要な者もいる。多面相から成る暴力の損害の軽減を第一の目的とした平和教育プログラムの一環として、青年・成人向けの強姦防止マニュアルの作成が急務なのではないだろうか。平和と人間愛のために若者を教育する必要がある。平和へ導く価値観とその大切さを若者に教えていかなければならないだろう。

BIBLIOGRAPHIE

- Aubut, J. (2000). *Les agresseurs sexuels : théorie, évaluation et traitement*, Paris, Maloine.
- Bajos, N. et M. Bozon (2008). *Enquête sur la sexualité en France*, Paris, La découverte.
- Bardin, L. (1993). *L'analyse de contenu*, Paris, Puf.
DOI : 10.3917/puf.bard.2013.01
- Balier, C. (1996). *Psychanalyse des comportements sexuels violents*, Paris, Puf.
- Billon, B. (1984). *Viol et violeurs, Cahiers sur la femme et la criminalité*, Paris, Éditions du Centre National de la Recherche Scientifique.
- Barrois, C. (1998). *Les névroses traumatiques. Le psychothérapeute face aux détresses des chocs psychiques*, Paris, Dunod.
- Brison, S. (2003). *Après le viol*, Paris, Éditions Jacqueline Chambon.
- Brems, C. & P. Wagner (1994). "Blame of victim and perpetrator in rape versus theft", *Journal of Social Psychology*, 134: 363-374.
DOI : 10.1080/00224545.1994.9711741
- Bourillon, J. (1999). *Les criminels sexuels*, Paris, L'Harmattan.
- Caillois, R. (1988), *L'homme et le sacré*. Paris, Gallimard.
- Campbell, A., & S. Muncer (1994). "Sex differences in aggression: Social representation and social role", *British Journal of Social Psychology*, 33: 233-240.
DOI : 10.1111/j.2044-8309.1994.tb01021.x

- Campbell, A., S. Muncer, & B. Gorman (1993). "Sex and social representations of aggression: A communal-agent analysis", *Aggressive Behavior*, 19(2): 125-135.
DOI : 10.1002/1098-2337(1993)19:2<125::AID-AB2480190205>3.0.CO;2-1
- Campbell, A., S. Muncer & J. Odber (1997). "Aggression and testosterone: Testing a bio-social model", *Aggressive Behavior*, 23: 229-238.
DOI : 10.1002/(SICI)1098-2337(1997)23:4<229::AID-AB1>3.0.CO;2-F
- Cloutier, F. (1966). *La santé mentale*, Paris, Puf.
- Cormon, V. (2004). *Viol et renaissance*, Paris, Les éditions de l'Archipel.
- Crocq, L. (1999). *Les traumatismes psychiques de guerre*, Paris, Odile Jacob.
- Dallayrac, D. (1983). *Pulsion de viol. Crime sans cause et causes du crime*, Paris, Robert Laffont.
- Daligand, L. et D. Gonin (2000). *Violence et victime*, Lyon, Méditations.
- Damiani, C. (1997). *Les victimes : violences publiques et crimes privés*, Paris, Bayard.
- Darves-Bornoz, J-M. (1996). *Syndromes traumatiques du viol et de l'inceste*, Toulon, Congrès de psychiatrie et de neurologie de langue française.
- Damus, O., C. Wulf, J. Saint-Fleur et D. Jeffrey (2017). *Pour une éducation à la paix dans un monde violent*, Paris, L'Harmattan.
- De Mijola, A. et S. De Mijola Mellor (1996). *Psychanalyse*, Paris, Puf.
- Deutsch, H. (1994). *Psychanalyse des fonctions sexuelles de la femme*, Paris, Puf.
- Dollard, J., N.E. Miller, L.W. Doob, O.H. Mowrer, & R.R. Sears (1939). *Frustration and aggression*, Yale University Press.
DOI : 10.1037/10022-000
- Durand, M. V. et D. H Barlow. (2002). *Psychopathologie : une perspective multidimensionnelle*, Bruxelles, De Boeck.
- Éliade, M. (1959). *Initiation, rites, sociétés secrètes*, Paris, Puf.
- Farzaneh, P. (2006). *Contribution à l'approche intégrative des comportements agressifs*. Note de synthèse en vue de l'habilitation à diriger des recherches, Laboratoire de psychologie sociale de l'Université Paris-5 René Descartes.
- Ferenczi, S. (1934). « Réflexions sur le traumatisme », dans S. Ferenczi, *Psychanalyse IV*, Paris, Payot.
- Fredrickson, B. L. (1998). "What good are positive emotions? Review of General Psychology", *Journal of Division 1, of the American Psychological Association*, 2(3): 300-319.
- Fredrickson, B. L. (2001). "The role of positive emotions in positive psychology: The broaden-and-build theory of positive emotions", *American Psychologist*, 56(3): 218-226.
DOI : 10.1037/0003-066X.56.3.218
- Fredrickson, B. L. (2013). "Positive emotions broaden and build", In P. Devine & A. Plant (dir.), *Advances in experimental social psychology*, San Diego, Academic Press: 47: 1-54.
DOI : 10.1016/B978-0-12-407236-7.00001-2
- Freud, A. (1949). *Le moi et les mécanismes de défense*, Paris, Puf.
- Foucault, M. (1975). *Surveiller et punir. Naissance de la prison*, Paris, Gallimard.
- Garnot, B. (2009). *Histoire de la justice. France : XVIe -XXIe siècle*, Paris, Gallimard.

- Germain, B. et P. Langis (1990). *La sexualité. Regards actuels*, Québec, Éditions Études Vivantes.
- Greenberg, J., L. Simon, T. Pyszczynski, S. Solomon & D. Chatel, (1992). "Terror management and tolerance: Does mortality salience always intensify negative reactions to others who threaten one's worldview?", *Journal of Personality and Social Psychology*, 63 (2): 212-220.
DOI : 10.1037/0022-3514.63.2.212
- Guichard, J., & M. Huteau (2007). *Orientation et insertion professionnelle. 75 concepts clés*, Paris, Dunod.
- Hafer, C. L., & L. Bègue, (2005). "Experimental Research on Just-World Theory: Problems, Developments, and Future Challenges". *Psychological Bulletin*, 131(1): 128-167.
- Haidt, J. (2003). "The moral emotion", In R. J. Davidson, K. R. Scherer, & H. H. Goldsmith (eds), *Handbook of affective sciences*, New York, Oxford University Press: 852-870.
- Hite, S. (2002). *Le nouveau rapport Hite. L'enquête la plus révolutionnaire jamais menée sur la sexualité féminine*, Paris, Robert Laffont.
- Jaspard, M. (2011). *Les violences contre les femmes*, Paris, La découverte.
- Jankélévitch, V. (1966). *La mort*, Paris, Flammarion.
- Janoff-Bulman, R. (1979). "Characterological versus behavioral self-blame: inquiries into depression and rape", *Journal of Personality and social Psychology*, 37: 1798-809.
DOI : 10.1037/0022-3514.37.10.1798
- Jeffrey, D. (2003). *Éloge des rituels*, Québec, PUL.
- Jeffrey, D., D. Le Breton et J. J. Lévy (2005). *Jeunesse à risque. Rite et passage* : Québec : Les Presses de l'Université Laval.
- Herbert, T. B. & S. Cohen (1993). "Depression and immunity: A re-exanalytic review", *Psychological Bulletin*, 113 : 472-486.
- Lacan, J. (1962). *L'identification*, Séminaire inédit.
- Le Goaziou, V. (2011). *Le viol, aspects sociologiques d'un crime*, Paris, La documentation française.
- Lerner, M.J. (1987). "Integrating societal and psychological rules of entitlement: The basic task of each social actor and fundamental problem for the social sciences", *Social Justice Research*, 1: 107-125.
DOI : 10.1007/BF01049386
- Lerner, M. J. (1998). "The two forms of belief in a just world: Some thoughts on why and how people care about justice", In L. Montada & J. Lerner Melvin (eds.), *Responses to victimizations and belief in a just world*, New York, Plenum Press: 247-270.
- Leyens, J-P. et V. Yzerbyt (1997). *Psychologie sociale*, Sprimont, Pierre Mardaga éditeur.
- Lopez, G. et G. Filizzola (1993). *Le viol*, Paris, Puf.
- Lopez, G., A. Sabouraud-Séguin et al. (1998). *Psychothérapie des victimes : le traitement multimodal du psychotraumatisme*, Paris, Dunod.
- Le nouveau Code pénal haïtien.
- Morbois, C. et M.-F. Casalis (2002). *L'aide aux victimes de viol*, Paris, L'esprit du temps.
- Maccoby, E. E., & C. N. Jacklin (1974). *The psychology of sex differences*, Stanford, Stanford University Press.

- Malewska-Peyre, H. (1985). *Stratégies de construction de l'identité et d'insertion sociale de la seconde génération*, Paris, Centre recherche interdisciplinaire-Vaucresson.
- Melman, C. (2003) *L'homme sans gravité. Jouir à tout prix*, Paris, Denoël.
- Mounier, E. (1946). *Introduction aux existentialismes*, Paris, Gallimard.
DOI : 10.1522/24984412
- Mucchielli, A. (1994). *L'identité*, Paris, Puf.
- Mucchielli, L. (2004). « Les caractéristiques démographiques et sociales des meurtriers et de leurs victimes. Une enquête sur un département de la région parisienne dans les années 1990 », *Population*, 2(59) : 203-232.
DOI : 10.2307/3654953
- Olweus, Dan et al. (1980). "Stability of aggressive reaction patterns in males: A review", *Psychological Bulletin*, 86: 852-75.
- Razon, L. (1996). *L'énergie de l'inceste*, Paris, Denoël.
- Sibony, D. (1995). *Événements II, psychopathologie du quotidien*, Paris, Seuil.
- Short, R.J., & R.J. Simeonsson (1986). "Social cognition and aggression in delinquent adolescent male", *Adolescence*, 21 (81): 159-176.
- Sullivan, D., M. J. Landau, & A.C. Kay (2012). "Toward A Comprehensive Understanding of Existential Threat: Insights From Paul Tillich", *Social Cognition*, 30 (6): 734-757.
DOI : 10.1521/soco.2012.30.6.734
- Solidarite Fanm Ayisyèn-SOFA, Rapport-Bilan XI, Des cas de violence accueillis et accompagnés dans les centres d'accueil de la sofa, année 2010-2011, Port-au-Prince, Haïti.
- Stone, A. A., D.S. Cox, H. Valdimarsdottir, L. Jandorf & J. M. Neale, (1987). "Evidence that secretory IgA antibody is associated with daily mood", *Journal of Personality and Social Psychology*, 52: 988-993.
DOI : 10.1037/0022-3514.52.5.988
- Tangney, J. P., & Dearing, R. L. (2002). *Shame and guilt*, New York, Guilford Press.
- Thomas, E. (1986). *Le viol du silence*, Paris, Aubier.
- Tisseron, S. (1992). *La honte : psychanalyse d'un lien social*, Paris, Dunod.
- Tugade, M.L., M. Shiota & L. Kirby (dir.) (2014). *Handbook of positive emotions*, New York, Guilford.
- Van Gennep, A. (1981). *Les rites de passage*, Paris, Éditions A. et J. Picard.

NOTES

1. SOFA (Solidarite Fanm Ayisyèn)の提出したハイチ人女性に対する暴行についての報告書によると、2010-2011年、性暴力の被害女性は246人であった（西県で99件、内51件は未成年の被害者。南東県で40件、内34件は未成年。アンティボニット県で64件、内36件は未成年。グランダンス県で43件、内32件は未成年）。異なる地域で収集されたこれらのデータからは小児（女兒）性犯罪が危惧される。というのは、大多数の被害者が3歳から17歳の女兒、少女、未成年女性だからだ。輪姦（14,23%）以外の性犯罪については特記されていない。この数字は実際にハイチで起こった性犯罪の実態を反映していない。ハイチでもどこでも、一般的に強姦の被害者と犯罪者は口を閉ざす。フランスの女性に対する暴行の国内調査

(ENVEFF) 及びフランスのセクシュアリティ調査 (CSF) によると、強姦の被害女性の90%は告訴していないという。

2. 大多数の性犯罪は集団による輪姦である。犯人が警察に逮捕されるケースはごく稀である。暴行犯の一人が被害者と面識のある場合もある。
3. ハイチ・クレオール語によるインタビューの書き起こしは全389頁に及ぶ。
4. 本論文は主に強姦被害者から聞き取った事柄に焦点を置いたため（心理学的見地による被害者学）、研究結果を網羅的に扱ったわけではない。
5. これらの強姦の多くは近所、近隣で発生した。被害者、性犯罪者は共に下流階級もしくは大家族の出身である。
6. 人類学者アルノルト・ファン・ヘネップ (Arnold Van Gennep) は誕生、死、結婚、婚約等の通過儀礼を描写し説明するため、方法論と理論に於いて普遍的なこの三局面の図式化を考案した。この多面構造は見知らぬ者による強姦被害の体験とまさに合致し、他のタイプの強姦にも適用され得る。しかし、この三局面それぞれに相当する実体験にどのような意味を与えるかは被害者によって異なる。
7. 強姦は被害者の身体的、心理的レジリエンスを弱め、ネガティブ感情が生まれることによって免疫力を低下させる (Stone *et al.*, 1993)。いくつかのインタビュー証言は、ネガティブ感情と心拍リズムの変動及び呼吸障害との関連性を示唆している。多くの被害者は見知らぬ者から強姦に遭った後、強姦を将来的に再発し得る脅威として捉えるようになり、被害者が慢性的な不安を持つ原因となっている (Durand et Barlow, 2002)。
8. 自己破壊のプロセスは被害者の精神的、心理的レジリエンスの衰退だけでなく、実存的次元での恐怖心の抑制不能とも関連付ける必要がある (Greenberg *et al.*, 1992)。実際、被害者はこの期間、まるで生ける屍であるかのような感覚を覚える。自己破壊のプロセスは、摂食拒否、自傷行為、アルコールや薬の過剰摂取など様々な形で現れる。
9. 過渡期とは対照的に、統合期は被害者がストレス対処法 (コーピング) を発達させて強姦体験から「生き延びる」ために自己再生する、もしくは自尊感情、自信、自己コントロールの錯覚などの心理的エネルギーを回復するプロセスに相当する。ポジティブ感情の表出により (Fredrickson, 1998, 2001, 2013; Tugade *et al.*, 2014)、被害者は自己、そして他者と相互に作用できるようになる。それは、被害者の潜在能力 (エンパワーメント) を涵養する土壌作りと言い換えられよう。被害女性は自己の人生と社会生活に再び意味を見出すため、強姦の事実と正面から向き合うことを受け入れる。自尊感情を傷つけないよう防御的な態度を取る。「強姦は不注意の至り、二度と起こりはしない。それは錯覚だ、でも励みになる錯覚なのだ...」 (Leyens, Yzerbyt, 1997)。自らに鞭打つこの行為 (*behavioral self-blame*, cf. Janoff-Blumman 1979) は、自己コントロールと前途のコントロールについてのポジティブな錯覚を再活性化させるのに有効なようだ。
10. 認識論的社会的言語的コミュニティとは、共通の言語、知識体系、価値観、信仰、世界観を持つ個人から構成される集団を指す。
11. 強姦行為 (性的攻撃) がまれに女性と結び付けられるのは、女性の攻撃性が自己コントロールの喪失と罪悪感に依るからである。男性は女性よりもはるかに攻撃的である (Short et Simeonsson, 1986; Olweus *et al.*, 1980; Maccoby et Jacklin, 1974)。強姦は男性に特有のものである。暴行者の97%は男性である (フランス内務省による統計)。
12. ここで言う『base』とは、下流階級地区で強盗、強姦、殺人、誘拐、麻薬の密売等の不法行為を行う武装グループを指す。
13. カイネウス (カイネス) はポセイドーン (ギリシア神話の海と地震を司る神) に強姦された。もう二度と強姦に遭わないよう男性に変わることを願い出、その望みは即座にかなえられた。
14. 罪悪感を道徳感 (*moral emotion*, cf. Haidt, 2003) と捉える学者もいる。被害者が罪悪感から自己を解放する時、個人の価値観や内面的な特徴と関係を断つ。自身の性格や内面的特徴を問題視するのではなく、自身の不注意な行いを責めるのである (『カーニバル祭に行くべきではなかった...』)。

15. 羞恥心によって、見知らぬ者から強姦に遭った被害者は、「過渡」期に家から出られなくなってしまう。被害女性の自尊感情は羞恥心というネガティブ感情によって衝撃を受けるのだ (Tangney et Dearing, 2002)。そして、自身が透明な存在になったかのような感覚を覚える。世の中が浸透性を持つように感じられるのだ。
16. これらの犯罪者の中には強姦を今後再発することのない単なるトラブルと捉える者がいる。このことは、自尊感情を守るための防御システムが働いていると言えるだろう。強姦者に見られる他の防御システムとして逃避が挙げられる。例えば、被害者を真正面から見るのを避けるために過度の飲酒をすることなどである。
17. フランスでは、多くの研究によって貧困層に属する犯罪者が最も多く投獄されていることが明らかになっている (Le Goaziou, 2011 ; Garnot, 2009 ; Mucchielli, 2004)。

RÉSUMÉS

強姦は実存的危機をもたらし、個人として生きること、他者と共に生きること、そして人と繋がり合って生きることにも極めて重大な影響を及ぼす出来事である。精神的、心理的、身体的な苦しみの原因である。年月が経った後でも多くの被害女性が事件の記憶を留めている。強姦が女性のアイデンティティーにもたらすネガティブな影響に議論の余地はないだろう。本論文の目的は、強姦が被害女性のアイデンティティーに及ぼす影響を分析すること、強姦中並びにその後、被害者の経験する感情について叙述すること、被害者が強姦の心的外傷をどのように乗り越えるのかを理解することの三つである

INDEX

Mots-clés : 強姦、女性、心的外傷、アイデンティティー、感情、実存的危機

Index géographique : Haïti

AUTEURS

オブリヨン ダミュス

ハイチ大学 (社会科学高等教育研究所)、キスケヤ大学 (教育科学学部)、
oobrillant@yahoo.fr